
さよなら、メリークリスマス

桜花閃々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよなら、メリークリスマス

【Nコード】

N4080M

【作者名】

桜花閃々

【あらすじ】

死に満たされた白い世界で、機械の少女は何を見つけたのか。

(前書き)

この小説は、デッドボールP様の『金の聖夜霜雪に朽ちて』を元とする二次創作物です。

許可はとっておりませんので、もし掲載が不適切であると判断すれば削除します。

——ここは……どこだろう。

一面の銀世界……少女の目には、かろうじてその様子が見てとれる。

だが、それだけだ。

少女は吹雪く世界の中に、そこにあつたはずの明るい雑踏、車や自転車、往來、人々の笑い声、流行の歌、活気付く商店、きらびやかなゲームセンター、愛しい人の笑顔、そのいずれも見出だすことは出来なかった。

暗黒。普通の人の目にはそのようにしか映らないであろうその景色を、少女の目は銀世界としてとらえることが出来た。

それはなぜか？

……彼女は人間ではないから。

アンドロイドとして作り出され、世界に送り出された機械の身。それが、彼女がこの極寒の世界で生存出来る理由だった。

——……誰もいない。当たり前か。

極限の環境の中で人々は死に絶え、亡骸は雪の中に埋もれた。少女の主人も例外ではなく、彼女が発見した時にはパソコンに突っ

伏して凍りついて息絶えていた。

パソコンには、歌うことが大好きだった彼女へ向けた楽譜が書きかけのまま残っていた。

彼女は悲しかった。人間であれば、きっと涙が枯れるまで泣いただろう。

だが、そうはならなかった。

アンドロイドの身体は泣くための涙さえ持ち合わせていなかったのだ。

少女は心で泣きながら…現実には嗚咽をもらしていたかもしれない…彼の亡骸を庭に土を盛って埋葬した。そのうち彼が住んでいた家も朽ちて崩れてしまったので、そこから柱を取り出して簡素な墓を作った。

柱はかなり重たく、折れた部分が尖っていて痛かったが心の方が痛かったのであまり気にはならなかった。

彼女の主人のようにアンドロイドに埋葬された幸運な人々はごく一部で、その他大勢の人々の亡骸は野ざらしのまま雪に埋もれた。

主人が書いてくれていた書きかけの楽譜データを保存して、彼女はそれを夜通し歌って過ごした。

悲しみをまぎらわすためにはそうするしかなかった。

…どこかに仲間がいるかもしれない。

そう思いたって家の跡地を出て繁華街を目指した彼女だったが、見えてくるのは雪、雪、雪。

時々雪の下に異質な感触が伝わってくるのを必死で無視しながら、
彼が昔連れていってくれた街並みを目指して今に至る。

アンドロイドは時々見かけるものの、既に壊れて動かなくなっ
てしまったり、歩いているのを見かけて声をかけても、

「ま、スター、どこにイルノ？」

などと声を上げてあらぬ方向を見つめながらふらふらと歩いて行っ
てしまう。

ああなってしまったアンドロイドはもはや手遅れ、壊れるのを待つ
のみだ。

彼女はその光景にゾクツとしながら、さらに歩みを進める。

――寂しい。

――こわい。

歩いても歩いても、そんな感情しか浮かんでこない。

辛くて苦しくて、堪らなくなっ
て彼女は自分の主人の事を思い出そ
うとした。

『おっ。こいつが噂のアンドロイドだな！
これからお前の主人ってことになる…だ。よろしくな！』

幸せな記憶に、ちょっとだけノイズが入った。

——私はもう、あの人の名前すら思い出せないんだ。

そう考えると悲しくて悔しくてたまらなかった。
それでも断片的に、楽しかった頃の記憶を辿る。

『アンドロイドだからってそんな畏まなくていいぜ。そんな口調
で毎日会ってたら疲れちまう。もっとフランクに話そうぜ。』

変な事を言う人だと思った。

『歌が好きなのか？』

そう笑顔で問いかける、記憶の中のマスター。
はいと答えると、

『よし、ちょっと待ってな。』

と言ってすぐに短い1コーラスの楽譜を書いてくれた。

『なあに、昔とった杵柄ってやつさ。』

はにかんだ笑顔。

——そういえば、マスターはいつでも笑ってたな…。

彼女は主人のその笑顔が大好きだった。

あの笑顔のためなら何でも出来る気がした。

この気持ちがあンドロイドとして当然のプログラムだったのか、それ以上の何かがあったのかは今となってはわからない。

考えることを一旦やめ、周りを見回し何か目印がないか見てみると、高くそびえるビルが見えた。
さらにその上にわずかな違和感。

世界中を被い、死の世界にした雲が一部切れていた。
そこから見えた星空。

『あれはオリオン座って言うんだ。』

星が好きだった主人が教えてくれたオリオンの伝説。
もはや語り継ぐ人もいない星座達の織り成す物語。

「マスタあつ…！」

——もっと…もっと聞きたかったよ…！

彼女はうずくまり、両手で顔を被った。人並みに柔らかいはずの頬からは、固い感触と「シャリッ」という音が返ってきた。

——私もマスターと一緒に死ねたらよかったのに。

そんな風に何度思ったことだろう。今、その思いはなおさら強くなった。

かつては「寒い」という感覚のあった彼女の身体も、安全装置のよ
うなものが働いたのか今は寒いという感覚はない。
凍え死ぬことは出来ない身体なのだ。

——どこまで来たのかな。

腕についた多機能パネルのマップ機能は壊れていたが、特徴的な駅
ビルの屋根が見えてきたので、どうやらもうすぐ駅前の繁華街だっ

た場所に入るということがわかった。

駅前の大通り。ここも本来ならば平日は通勤、休日は観光に出掛け
る人でごった返している場所だった。

そこも一面の銀世界。窓ガラスの割れた車は半分雪に埋まり、点々
とアンドロイド達が転がっている。

ここは特に、雪の下には大量の亡骸が埋まっていることだろう。

意を決して雪を踏みしめる。一縷の望みをかけて転がっているアン
ドロイド達を叩いて声をかけてみるが、結局すべて無駄足だった。
彼女は途方に暮れ、違うことに意識を反らそうとした。

――さっきオリオン座が見えたってことは、今は冬なのかな？

一年中雪が降っていたせいで季節感がない。
多機能パネルで日にちを調べてみる。

――内臓の時計が無事なら、ね。

カレンダーはちゃんと出た。
20XX年の12月25日。

――なんてロマンのないホワイトクリスマスなのかしら。

彼女は皮肉っぽく、寂しげに笑うと再び歩きだした。

駅前の商店街、マスターはここに彼女を連れてきたことがあった。

——たい焼き屋のお姉さんは優しかったなあ。

もちろんたい焼き屋にお姉さんの姿はない。

さらに歩くと、今度はゲームセンターだった建物が現れた。

——マスターは車のゲームが好きだったんだよね。

電源は全て落ち、無用の長物と化したゲーム達。

その奥の方に……あった。

車のシートを型どった座席、何を映すこともなくなった画面。

彼女はそれらを懐かしそうに眺めた後、ひとつの考えに至った。

——もう、生き残ったアンドロイドはいない。

マスターの所へ帰ろう。

彼女はもと来た道を辿りだした。

大通りを抜けた所で、彼女は自身の異変に気づいた。

――全身が軋んできた。私もそろそろダメなのかな。

それでも、彼女は足を止めずにがむしゃらに主が眠る場所を目指した。

――最期くらいは：同じ場所で迎えたいから。

最後のささやかな願いだった。

もはや足元の違和感は気にならなくなった：いや、気にしている余裕がなくなった。

雪をかき分けかき分け：ついに彼女は自分で立てた柱を見つけた。

――やっと、帰ってきた。ただいま、マスター。

物言わぬ柱に、彼女はマスターが悲しそうな顔をしているような錯覚をした。

――マスター、お願い。最期に：また、あの笑顔を見せて。

そう願いながら彼女はふらふらの足取りで柱に歩み寄った。

『お帰り。』

マスターがちょっとだけ悲しそうな笑顔をして、迎えてくれた気がした。

あと少しの所で、彼女は足がもつれて倒れてしまった。

「マスター、私ね…。」

それでもなんとか柱をつかんで身体を柱に寄せながらうわごとのように言う。

「最期に…、言いたいことがあるの。」

身体を引き寄せ、柱を抱きしめる少女。

「メリークリスマス、マスター。私…マスターのこと…大好きだったよ。」

柱をいとおしそうに抱きながら言う。

吹雪は彼女を埋めようと、容赦なく彼女と柱に雪を叩きつけた。

「ううん、それだけじゃ…ちょっと弱いかな。」

そんなものは意にも介さず柱に語りかけ続ける。

「こういう風に…言い換えてもいいかなあ。」

彼女はまるで耳元でささやくように言った。

「ア…い…シ…テ…る…。」

少女の瞳から光が消え、柱を向いていた顔、首がカクリと力を失った。

死の雲は、再び世界を覆い隠してしまった。

〈FIN〉

(後書き)

いかがでしたでしょうか。

元の曲である『金の聖夜霜雪に朽ちて』は曲調はかなり明るいですが、内容はとても切なく悲しいシリアスなものとなっています。今回は内容に忠実に書かせていただきました。

驚くべきは、このような事態がとある条件において発生するかもしれないというシュミレーションがなされているということです。

その条件とは、世界規模の核戦争によって大量の核兵器が使われることだそうです。

この機会に、私達が当たり前に享受している平和に思いを馳せてみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4080m/>

さよなら、メリークリスマス

2010年10月10日06時04分発行